

受難節第主2日 説教 「私たちの住まい」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2022年3月13日

マタイによる福音書 9:1~8

語るべき言葉が見つからない、私たちの長い人生において、言葉を失う経験は度々起こりうるものです。そして、それが今この時でもあるのでしょうか。しかし、それが永遠に続かないことも私たちは知っています。ですから、そのためにも、賞味期限をすぐに迎えるような言葉ではなく、色あせることのない確かな言葉が求められるのです。それは、最悪の状況を脱した後、その時に何を語るかでその後のことが決まるからです。では、そこで語られるべき私たちの言葉とはいったいどのようなものなのでしょう。それは、絶望とはまったく無縁の、希望だけを見つめうる言葉ではありません。当然ではありますが、最悪の状況以前とそれ以後とは完全に切り離されているわけではありません。そうである以上、前と後とはどこかで必ず繋がっています。けれども、それはまったく同じではありません。それゆえ、前と後ろとはどこかが必ず違っているわけです。そして、その違いは初めは小さく、それゆえ、何がどう違うのかも分かりません。けれども、それに気がつかずに時を重ねるなら、その違いは違いとなって現れることにもなるのです。いわゆる、ボタンのかけ間違いということですが、ただ、ボタンのかけ間違いをただすように、歴史の歯車を元に戻すことはできません。そういう意味で、絶望と希望とは地続きのものであり、それを繋ぐ確かな言葉が私たちには必要なのです。

ですから、今、私たちに問われていることは、私たちが今何をするか、何ができるかということだけではありません。そのことに加えて、これまでを振り返りつつ、その足下を見つめることです。そして、そこから将来を見つめるために私たちは色あせることのない言葉を欲するのですが、ただ、ロシアに対する制裁がまったく功を奏さないように、厳しいだけの言葉はこれまでの失敗をただ裏付けるだけでしかありません。しかし、だから、私たちは何もしないでいいということではありません。今、私たちが神様の御前でその御心に問うているように、私たちに向かって同じように問うているの

が神様であり、イエス様であるからです。そして、今と同じように、もしかしたら今以上に、神様一、イエス様一と、その御旨に問うたのが11年前のこの日の私たちでありましたが、その時、私たちが求め、祈りの内に与えられた言葉はどんな言葉だったのでしょうか。それは、私たちを目の間にある厳しさに閉じ込めるだけのものではなかったはずで

す。一昨日の金曜日、東日本大震災を覚えて、私たちは共に祈りを献げたわけですが、11年前のあの日も同じ金曜日でありました。そして、その翌日には福島第一原発で水素爆発が起こり、私たちはこうして不安と恐れの中に主の日を迎えることになったのです。そして、前任地でのことですが、そうした中で起こったことが流言飛語、デマでありました。いわゆるチェーンメールというものが流れてきて、情報の拡散を呼びかけたのです。そこで、呼びかけられた人は悲壮感を漂わせながら、今すぐに行動に移そうと訴えました。ただ、その内容は、見てすぐにデマと分かるものでもありません。けれども、信じて疑わない人に真実が届くことはありませんでした。そこで役員数名で説明し、ようやく納得が得られ、事なきを得たということがありましたが、ただ、それが起こったのは礼拝直後のことでもありません。礼拝後、携帯を確認し、そのようなメールを見つけたのでしょうか。また、だから、なんとかしなければと、そう思ったりもしたのでしょうか。なぜなら、その日の礼拝の中で私が繰り返し語ったことは、「言葉を失うしかない状況にあって、私たちには語るべき言葉がある、ないのではなくて、あるのだ」ということであつたからです。ですから、流言飛語に惑わされるような事態が礼拝後に生じたのはそれゆえのことであつたのでしょうか。けれども、「語るべき言葉がある」と語ったのは、すぐに何かができる、だから、何かをしなければならぬ、ということをお伝えしたからではありません。それは、聖書の御言葉に根ざして、ということであり、御言葉の上に立ってということであつたからです。ところが、それが伝わらなかった、その理由

は、私の言葉が つたなく、また、言葉が足りなかったからでもあるのでしょうか。けれども、今こうしてあの時のことを振り返り思うことは、「語るべき言葉がある」と語った自分自身の言葉の意味が、おかしい話ではありませんが、今、少し分かったような気がするのです。それは、私が「語るべき言葉がある」と申し上げたことは、初めから打てばすぐに響くということをして期待してのことではなかったからです。なぜなら、私たちに与えられている言葉は、期待通り、思い通りに物事を動かすために与えられているものではないからです。そして、その中で起こったことが今申したとおりのことでもありますが、けれども、結果はどうであったのか。御言葉に聞きつつ礼拝を共にしたその群れが、礼拝直後のさざめきにもかかわらず、落ち着きを取り戻すことができたのです。つまり、誰彼の力が足りない、誰のあり方が間違っている、そういうことではなく、群れ全体が落ち着きを取り戻すことができたのは、まさに群れ全体を包んでいる確かなものが「そこに」あったからです。そして、それが私たちに与えられている言葉であり、この言葉によって導かれているのが「私たち」でもあるのです。ですから、語るべき言葉が何かと問われれば、それは、言葉を失うしかない状況にあって、私たちがどこに立って何を見ているのか、ということです。それゆえ、私たちが語るべきことはこの経験であって、それ以外の何ものでもありません。そして、そのことを私たちに明らかにしてくれているのがこの日の御言葉でもあるのです。

今日の御言葉の最後のところでは、イエス様のなさったことを見た群衆が「これを見て恐ろしくなり、人間にこれほどの権威が委ねられた神を讚美した」とありますが、このように、イエス様のなさることは、つまり、その言葉も振る舞いも、人々の心を驚嘆みにするところがあるのです。そして、私たちはそのことをよく知っています。それは、私たちがまた驚づかみにされたその一人であるからです。けれども、その私たちが流言飛語、悪意や中傷といった根も葉もない言葉に惑わされてしまうのはどうしてなのでしょう。それは、同じ一つのものを見たとしても、私たちのものの見え方、感じ方は常に一致するわけではないからです。つまり、その立つ位置によって見え方が異なるということです。そして、それに

ついては私たち一人ひとりについても同じことが言えますし、それゆえ、人の子として生きたイエス様についても同じことが言えるということです。従って、ここでイエス様の評価が大きく分かれているのはそのためです。群衆がそのなさったことを見て、イエス様のことを「神に権威を委ねられた者」と評価する一方で、イエス様の発言を聞いた律法学者がその心の中で「この男は神を冒瀆している」と評価しているのはそれぞれの立つところが違うからです。ですから、イエス様のその評価を巡ってはいずれが正しいかは単純に決めつけられるものではありません。まただから、御言葉はここでの事実の伝え方に一つの含みを持たせているのです。

御言葉は、「人間にこれほどの権威を委ねられた神を」と、群衆のイエス様に対する見方を肯定的に描く一方で、「この男は神を冒瀆している」と律法学者の否定的意見をも記します。このことはつまり、神様というお方を中心にして、イエス様についてのもの見方が右と左とに別れているということです。ただ、イエス様というお方はそもそものところでは、群衆はどうか。イエス様の権威ではなく、神様の権威を優先させているのですが、このことはつまり、イエス様のことを自分たちと変わらない一人の人間としか見なしてはいないということです。なぜなら、群衆が見ているのはイエス様のその特殊な能力であって、イエス様が神様の独り子であるとはまったく想像だにしていけないからです。では、律法学者はどうか。御言葉は群衆とはまったく正反対の評価を下しているのですが、けれども、その立っている場所は群衆と同じです。あくまで人としての視線でしかイエス様を見ようとはしていないからです。つまり、イエス様のことを私たちと同じ一人の人間としか見ていないから、その発言に苛立ちを覚えたということです。従って、それぞれの事実が示すことは、それがイエス様に対す

る人間の素直な反応であるということでは、私たちがどうでしょうか。その力、その権威を見せつけられれば信じるのは当たり前のことです。けれども、もしそうでなければどうなのでしょう。そこがイエス様の理解を巡るの限界と云うことなのでしょう。

私たちが何かを分かったという場合、その多くは白黒をはっきりつけることができたからです。ですから、そういう意味では、それぞれの視点の違いは、それぞれにとっての白黒をはっきりつけたということです。つまり、片やイエス様は神の権威を身にまとう超人であり、片や、神の権威を汚す大悪党ということです。そして、イエス様に対するそうしたものの見方は遠い昔に限ったことではありません。キリスト教界の中では、そうした意見の違いは今でも普通に見られることだからです。それゆえ、正しい信仰理解は大切なことではありますが、そもそもこのところと言えば、イエス様が神の子であると同時に、人の子であるということを実証できる者が本当にこの世にいますでしょうか。けれども、教会はそれを証言してきたし、教会に連なる多くの人々もまたそれを信じてきたわけですから、いつの時代にあっても私たちが問うべきところは、イエス様が神の子か、それとも人の子か、ということ事ではありません。大事なことは、私たちが御言葉伝えるこの真実を信じてきたというこの事実なのです。

では、この真実はどこから出て来たものなのでしょう。それは、私たちの頭の中から出て来たことではありません。信じる私たちの経験として語られたものが、この神の子であり、人の子であるということだからです。ですから、もし、それが私たちの頭の中で整理し導き出したものだとすれば、その前にどういったことが起こったのでしょうか。神の子であり、人の子であるということは、そもそもこのところと言えば、それぞれが矛盾しているということです。神様という人間から見て遠い存在と、人の子というイエス様と私たちの近さが一つに混じり合うことはないからです。従って、イエス様についてあれこれ考える際に、胸にストーンとすぐに落ちないのはそのためです。まただから、それをなんとか腹に落とそうとして、人はあれこれと足掻くことにもなるのでしょう。ただ、その場合の評価は肯定的なものであっても否定的な

ものであっても同じです。私たちが人間的な視点に立つ限り、結局はコインの裏表に過ぎないからです。まただから、私たちは、どちらが裏でどちらが表かと、白黒はつきりつけたくもなるのでしょう。ただ、だから、信仰は曖昧なままでいいということではありません。神の子であり、人の子であるとの信仰がどこに立って、どのようにしてこのような結論に至ったのか、それについて私たちがもしそれを腹に落としたいのであれば、曖昧なままでいることはできません。

イエス様が律法学者に向かって、「『あなたの罪が許される』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか」と問い、そして、そこでイエス様のなさったことは、中風で苦しむ人を起き上がらせて歩けるようにすることでした。それは、イエス様が「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らしめる」ためでもあります。しかし、もし起き上がらせることができなかつたらどうだったのでしょうか。その権威はすぐに失墜することにもなりますが、それがイエス様にとっての十字架の出来事でもありました。つまり、十字架の出来事は、その時、その瞬間、イエス様の権威が地に落ちたということです。しかし、話はそれで終わりません。三日後にイエス様はそのお言葉どおり甦られたのです。つまり、神の子であり、人の子であるとの理解は、十字架を経てイエス様が甦られたがゆえに与えられたものであるということです。そして、ここにイエス様の本質、実体が現されてもいるのですが、ですから、私たちが、神の子か、それとも人の子かと、いずれに偏るのではなく、御言葉が語るそのままのイエス様の実体、本質を理解するには、十字架から復活へと向かうプロセスを私たちもまた辿らなければならないのです。

しかし、毎年毎年、それを繰り返してきたのが私たちであります。ところが、その私たちが、イエス様が神様の子であると同時に、人の子であるという、この御言葉の伝える真実を腹に落とすことができずにいるのです。ですから、それについては非常に心許ないように思います。まただから、私たちは毎年毎年、イエス様と共に十字架の道行きを共にし、復活へと向かうプロセスを辿るのですが、けれども、それは私たちにとっては信仰的疑似体験をするようなものではありません。実際にイエス様はその私たちと共に

歩み、共に十字架につき、共に復活へと向かう道筋を歩んでくださっているのです。受難節から復活節へと向かう私たちの歩みはそういうものでもあります。けれども、私たちにはその実感がない。そのためにも、無理に実体なるものを作りだそうとすることがあるのです。あるいは、それが難しいことが分かっているがゆえに、十字架と復活の出来事を頭で整理して理解しようとしてしまう、イエス様の十字架と復活の出来事を、私たちが時にシンボリックに理解しようとするのは、無理なことを無理無理理解しようとした結果でもあるのでしょう。しかし、この日の御言葉が語ることは、私たちはそのように白黒つける必要はないということです。なぜなら、神の子であり、人の子であるということは、私たちが白黒つけることではなく、神様の御心として私たちに示されたことであり、それゆえ、白黒つかない、つけられない、けれども、そこに現されたものが神様の権威であり、力であった、御言葉が語ることはこのことであるからです。

罪の赦しとその結果としての救い、このことは、どこまで行っても私たちには本当の意味で分かることはありません。なぜなら、私たちのできることではなく、ただ与えられるのを待つだけのものだからです。けれども、イエス様はそれを私たちに伝えて下さった、ただ、それで私たち人間がそのすべてを分かったということではありません。なぜなら、罪という者の考え方が分かっても、私たちが自分の背中を一生その目で見ることがないように、罪そのものを知ることはできないからです。それゆえ、十字架の奥義はどこまで行っても私たちには、自分は分かかったと、そう胸を張って自信たっぷりに何かを言えるものではありません。しかし、その私たちが胸を張って、イエス様を信じている、信頼していますと言葉にすることができるのです。それは、矛盾する言い方になりますが、すべてを分かっているからではなく、何も分かってはいないからです。けれども、だからこそそのまま終わることではない。イエス様が神の子であり、人の子とであるとの真実を、私たちがこうして知らされるのは、この分からないというところから立ち立ってのことだからです。そして、それを神様が与えた場所がイエス様を頭とする教会というこの群れでもありますが、そうであるなら、今ここで私たちに

問われていることは、私たちが何を分かかって、何ができるかということではありません。問われていることは私たちの交わりのあり方、その姿であり、そこが私たちの居場所、住まいであり、そこに私たちは生きているということです。

では、それが分かるためには何が必要なのか、それは、分からないがゆえに頭を垂れるということです。つまり、その時々と与えられる矛盾する思いをそのまま受け止めることのできる謙虚さ、私たちに求められていることはここに尽きると思うのです。それは、この、何が何だか分からない、けれども、この分からないということに謙虚に受け止め、そこで何かを語るとき、その時、何か動き出す、それは、中風の人の床を担ぎ、イエス様の御前に連れてきたその仲間たちがそうであるように、分からない、どうしてとの矛盾し合う気持ち、かき乱される思い、この自分にはどうすることもできない現実、その思いを私たちが引き受けつつイエス様の御前に集うからこそ、その私たちに神様の権威は示されることとなるからです。そして、それが私たちに与えられた十字架と復活の出来事であり、そのことをまた御言葉を通し聞き、この歩みを今年もしているのです。それゆえ、そこで私たちは知らされます。イエス様が私たちと共にいてくださっているということ、そして、私たちの群れ、私たちが生涯を通じて離れることのない教会というこの場所がそういうコミュニティであり、そういう場所であることを、信仰弱き自らであることを知って知らされることになるのです。

ですから、すべてが分かり、知っていることが私たちの力となるではありません。不完全で未完成であることを知るからこそ、その私たちがイエス様と共にいますがゆえにその進むべき道は必ず示されるのです。従って、そのためにも、私たちはこの経験を言葉にしていかなければなりません。そして、その言葉を手にするためにこうして共に礼拝を献げ、共に集うことをこれからも大切にしていかなければならないのです。それは、その私たちが共に歩んでくださっているお方がイエス様であるからです。祈りましょう。